

校長室から

校長室だより 第2号
令和2(2020)年5月19日発行
文責 宮城県古川工業高等学校
校長 佐藤 誠



先週5月14日(木)、新型コロナウイルス感染症対策のため全国に出されていた「緊急事態宣言」が宮城県他39県で解除されたことを受けて、県教育委員会は、5月31日(日)まで学校の臨時休業を継続した上で、6月1日(月)から学校の再開と通常授業の実施を決定し、5月15日(金)に県立学校に通知した。

いよいよ待ち望んだ学校再開となるわけだが、実際にはまだ2週間後のことであるし、この機会に今後も続く「臨時休業期間」とはどういうものだったかを振り返るとともに、学校再開後についても考えてみたい。ただし、6月1日(月)までの2週間の中で、国や県教委の新たな方針が出されたり、何らかの指示によって、対応に修正が加わったり変更になることもあると思われるが、そこは了承願いたい。

○あらためて「臨時休業期間」について振り返る

【昨年度分】3月2日(月)から臨時休業開始。期間は、3月24日(火)まで。これによりなくなった出校日は、全日制6日、定時制9日。結果、生徒の皆さんが登校した日数は、全日制2日、定時制1日。

【今年度】4月6日(月)の県教委の決定により、春休み明けから4月14日(火)まで臨時休業が延長。その間、本校では、始業式は定時制4月7日(火)、全日制4月8日(水)に実施し、あわせて入学式も規模等は縮小したものの全定合同で4月8日(水)に予定通りに実施した。その後、臨時休業は、4月13日(月)の決定により5月6日(水)まで延長、4月29日(水)の決定により5月10日(日)まで延長、そして5月5日(火)の決定により5月31日(日)まで延長、と何度かの延長により現在に至っている。結果的に、4月・5月の2ヶ月間はまるまる臨時休業となった。3月を含めれば、3ヶ月という極めて長期にわたる。

その間、全日制では、4月15日(水)から17日(金)と、5月12日(火)から14日(木)に各学科ごと1回ずつ登校日を設定して、課題等の回収・配付と各種連絡等を行っている。また定時制では、登校の替わりに家庭訪問やアルバイト先訪問を行うとともに、5月11日(月)以降は、18日・25日の毎週月曜日を登校日と設定して、課題等の回収・配付と各種連絡等を行っている。さらに、全定ともに、4月末には郵送により課題等の送付を行うことで、登校機会の少なさをカバーしている。

そして今週以降、全日制は、5月19日(火)から3日間の学年別登校日を設定し、その後5月22日(金)から29日(金)までは学年別登校日を2回ずつ設定して、6月1日以降の学校再開時にできるだけスムーズなスタートが切れるよう、徐々に学校での活動のボリュームを増やして進めることとしている。

しかし結局、現在の予定通りに6月1日が迎えられた場合でも、本来出校日としていた全日制34日・定時制35日のうち、生徒の皆さんが学校に登校できる日数は、全日制で6日のみ、定時制で4日のみとなる。これが、臨時休業期間の実際である。

○「学校の役割」とは何か、そして「学ぶ」とはどういうことか

生徒の皆さんは、3月からの臨時休業が続く中で、「学校」の存在をどのように感じていただろうか。あって当然の存在、自分の力を発揮できる場所、自分の居場所、etc。他にも様々あるだろう。その関係が、今、新型コロナウイルスによる臨時休業によって、いわば奪われたような日々が続いている。4月の後半になり、臨時休業がどんどん延長される状況の中で私が考えていたのは、生徒の皆さんは、一体「学校というコントロール枠」がない中でも、自力でコントロールして学習や運動などに取り組む生活を送ることができているのだろうか、ということだった。

学校生活の中には、自主的・自律的な活動がある反面、多くの制約や強制力を持って導く(いわゆる「指導する」)場面が存在する。この「指導」される立場になると、ある意味、その指導に乗っかってしまえば、半ば自動的に目的地や成果に連れて行ってくれる可能性が高くなる。自分が何もしないわけではないが、引かれたレールは走りやすく、あまり考えなくても目的地に近づくことができる。

対して、臨時休業期間中の自宅や学校外で過ごしてきた時間はどうか。家族や友達からの声かけはあっても、やるかやらないか、何をやるか、いつやるか、どのくらいやるか、自分で考え自分で決めていくことが必要だったのではないかと。さてその中で、まさしく自分で決めて自分から取り組んだものは何かあるだろうか。学校から指示した課題は、あくまでも学習を進めるための材料でありきっかけである。これらのきっかけから、あるいは生活の中から生まれた疑問を解決し、関心を広げて自分の知識見聞を広める活動こそ、「学ぶ」活動である。そのもっとも重要な要素は、自分から進んで取り組む自発的な活動だということである。これは、スポーツや文化活動でも同じである。

さて、生徒の皆さん、自分が過ごした臨時休業期間を振り返ってみて欲しい。「学ぶ」活動はあっただろうか。もし、足りなかったという思いがある人は、それこそが自分が身に付けるべき課題だということをしっかりととらえ、あと2週間をぜひ自律的に「学ぶ」活動に取り組んで欲しい。そして、学校が再開したら、学校生活の中でも、自分で考えて自分で決めて取り組む努力をしてみたい。

○3年生・4年生にとっての部活動の締めくくり、そしてこれからの部活動は

部活動に打ち込んできた生徒の皆さんにとって、このコロナ禍によって各種大会が中止になってしまったことへの恨めしさは計り知れないだろう。3月の全国選抜大会、4月の選手権、そして地区総体と県総体・定体連、さらに東北大会・インターハイ、文化部でも各競技会やコンクール・コンテストなど、7月・8月開催の行事まで軒並み中止となってしまった。特に、今年卒業年度となる全日制3年生・定時制4年生にとっては、自分の高校生活における残り少ないチャレンジの機会が奪われることになり、やりきれない思いが強いに違いない。想像することもできないこのような状況になってしまい、部活に打ち込む生徒の皆さんにかけられる言葉がなかなか見つけられない。

しかし、それでもあえて言わなければならないのは、これを何とか乗り越えて欲しいということだ。各部によって内容もタイミングも違うと思うが、何らかの形で、どこかのタイミングで、区切りをつけ、先に進むことが必要だ。競技や部門によっては、県総体に代わる大会等を模索している動きもあると聞く。そこが区切りになるかも知れない。人によっては、その前に決断する場合もあるだろう。いずれにしろ、自分の気持ちを整理して次に向かう、それがすごく重要だと思う。ここでもまた、自分で決断する、自分で自分をコントロールする、自分を律する力が求められている。

そして、来年に再び力を発揮するチャンスがある下級生の皆さんには、3年生・4年生の思いを受け止め、ぜひ心を込めて、精一杯にこれからの部活動に取り組んで欲しい。

○進路について考える

生徒の皆さんが、本校での学業を終えて進学や就職するにあたり、どのような力を身に付けておくべきだろうか。

今のような混乱状況にある経済の中でも、企業がどのような特長を持つ人材を求めるかは、以前までとあまり変化しないと考えられる。大卒等では、IT化やグローバル化に対応できる人材に注目が集まっており、また日本経団連のアンケートでは企業が求める要素トップ3は「コミュニケーション能力」「主体性」「チャレンジ精神」という調査結果となっている。そして高卒新卒に求める要素は、東京都経営者協会のアンケートによれば、「協調性」「コミュニケーション能力」「基本的な生活態度」がトップ3となっている。これは、会社組織が共通の目的のために、協調・協働して業務に取り組み、課題を解決しながら、成果を出していくために必要な要素と言える。

5月17日(日)河北新報朝刊1面に『新卒採用「減」26%に拡大 21年度 コロナ不況警戒 主要111社』という記事が掲載された。記事の配信元は共同通信社で、国内111社を対象とした2021年度(21年4月～22年3月)入社の大卒・大学院卒の新規採用に関するアンケートをまとめたものである。「採用数を20年度実績(見込み)より減らすと回答した企業が26%で、20年度入社の採用数を尋ねた昨春のアンケートの16%より拡大した」という。その理由を、「新型コロナウィルス感染症の影響で世界不況への警戒感が強まり、採用抑制の動きが出始めた」と分析する。

この記事は、あくまで大卒・大学院卒の新規採用に関するデータに関するものだが、かといって大卒等の求人・採用動向が、高卒の求人・採用動向と全く無関係というわけにはいかないだろう。一方、記事の対象となっているのは国内主要111社のいわゆる大手企業に関するものなので、中堅企業そして地元も含めた小規模事業者の求人・採用動向と同じとは言えないことは注意する必要がある。

その上で、基本的に、経済活動には継続性があるため、昨年度までの各種業界の動きが突然に180度転換するような事態は、このコロナ禍の中でも考えにくい。つまりは、各業界の大きな動きとしては、昨年度までの求人・採用動向の流れを基本として見ていくことは当然必要だし有効だと思われる。加えて、米中の経済摩擦、新型コロナによる世界経済の縮小等のグローバルな視点と、国内・東北地域・県内そして大崎地域の経済状況、各企業の状況、を見ていくことも必要であろう。大切なのは、あいまいなウワサに惑わされず、しっかりと裏付けのある信頼できる情報で確認することだ。

特に3年生の皆さんには、臨時休業の影響で進路活動のスケジュールがギュッと詰まってしまった中でも、今までの学校生活で身に付けた「協調性」「コミュニケーション能力」「基本的な生活態度」をフルに発揮して、自分の希望する進路先を獲得できるよう取り組んで欲しいと強く願っている。

○「新しい日常」という言葉と「新しい生活様式」

今、「新しい日常」という言葉をよく耳にする。私の知る限り、確定的に定義された言葉として使われているわけではないようだ。国語的な意味では、「非日常であったものが新しい通常の状態になること」だが、新型コロナウィルスとの共存であったり、遠隔授業の普及であったり、SNSの新しい活用法であったり、これからも世の中の有り様がどんどん変化と進化を遂げていく気がする。

新型コロナウィルスと共存していると言える状態になるまでには、ワクチンの開発を含め、最低でも2年以上の長期戦を想定する必要があるとも言われている。専門家によって提唱されている「新しい生活様式」に沿った、感染予防を基本とした過ごし方がこれからも必要となる。コロナ感染の発症パターンからすると、生徒の皆さん一人ひとりの今現在の行動が、2週間後の未来を決定づけるのだということをよく考えて、日々を過ごして欲しいと思います。